

海外研修を通しての学び —グアム・ミクロネシア連邦から日本を見つめなおして—

谷口光代（保健学研究科）

1. はじめに

今回、太平洋島嶼学特論の海外研修として、グアム・ミクロネシア連邦を訪れた。海外研修ならではの貴重な体験がたくさんでき、異文化や歴史を現地の方のお話や、実際目で見て肌で感じる事ができた。海外研修に行く前にグアム・ミクロネシア連邦の歴史や文化等について事前学習をしてはいたが、実際に現地を訪れ現地の人との触れ合いを通して、机上の学びではできない数多くの気づきや学びがあった。日本にいと自国のことを考えることや、自分と向き合うという時間はあまりないが、8日間日本を離れ、あらためて日本や自分自身について見つめなおすことができたため、ここではその学びや感じたことなどを述べたいと思う。

2. グアムを訪れて

リゾート地として日本人観光客の多いグアムは、私自身も以前観光として訪れたことがあった。マリンスポーツやショッピングがメインであり、史跡を巡ったりはしなかった。今回は研修であり、グアムの南部をレンタカーでドライブしながら、史跡やチャモロ文化村、グアム大学などを訪れ、グアムの歴史・文化を学ぶことができた。イナラハンは、チャモロ文化の伝統が根差す村¹⁾である。チャモロ文化村は、昔のチャモロ人の生活を再現した村で、海水から塩を作る工程や、ココヤシからココナツミルクやココナツオイルができる説明など、実際に見学できた。ウマタックは人口規模島内最少で、家屋数も200に満たない小さなコミュニティだが、この村の歴史は古く、世界一周の途にあった探検家のマゼランは、1521年にマリアナ諸島に寄港し、その寄港地がウマタックだったという説²⁾があるそうだ。島をドライブしていると所々に教会が建っている。グアムは1521年からスペインが統治していた歴史が影響している。その後アメリカ、1941年から2年7か月と日本が統治していたという歴史がある。様々な国に統治されたグアムは、純粋なチャモロ人はすでに存在しないと言われているが、様々な国に統治されたグアムの歴史からも、人間関係や国との関係にも今もなお影響を及ぼしていると考えられる。日本が統治していたのはわずか2年7か月であるが、日本人がチャモロ人にした行為はとても痛ましいことである。日本からみた世界の歴史をみるのではなく、今回、グアムから日本を客観的に見る事ができた。歴史は消すことはできないため、同じ過ちを起こさないためにも、日本人としてどうあるべきか、どのように考えていかなければならないのかしつかり向き合う必要があると感じた。グアムのイメージであるリゾートは、グアムのほんの一部であり、グアムの素顔に出会える南部ドライブ³⁾と表現されているように、グアムの南部を一周することで、私のイメージするリゾートのグアムとは違った一面を知ることができた。

グアム大学では、井上教授の講義とディスカッションできる貴重な時間をいただいた。井上教授の講義は、一つ一つの内容が深く、時間があれば一つ一つをもっとお聞きしたいぐらい、本当に興味深いものだった。その中でここでは2つ述べたいと思う。

一つ目は、『日本人の謙虚は美德ではない』という言葉だった。黙っているのは日本人の悪さで、ミーティングの時に黙っていると何も考えてないとみられるとのことだった。私自身も海外に出てこのことは痛感した。「自分の意見を自分の言葉で述べること」は、簡単なようで非常に難しいことである。日本人はミーティングの場でなぜ黙っていることが多いのだろうか。これは日本の教育が大きく影響している1つではないかと考える。看護の仕事でも患者を対象とした健康教室、学生を対象とした教育指導など指導の役割は大きい。今は「参加型」といって参加者が積極的に参加する教室や研修等が増え、従来の一方向に話をするやり方とは変わってきている。これは義務教育をはじめとする教育現場でも同じようなことが言えるのではないだろうか。私自身が学生だったときのことを振り返っても、自己主張せず、控えめで、協調性を重んじるような教育であり、やはり一方向が多くディスカッションする時間はほとんどなかったように思う。そのような環境や教育で、自分の意見を言うことは容易いことではない。やはり訓練が必要であり、グアム大学では、講義のあとに必ずディスカッションする時間を設けているとのことだった。日本人の感性を生かしつつ、自己主張をし、誰とでもコミュニケーションできる力を養うためにも、日本の教育の現場にもディスカッションできる場を積極的に取り入れていく必要があると思う。また、教育や指導する立場の人の姿勢として、「ファシリテーター」の姿勢や役割を持つことも重要なことではないかと考える。私自身ももう一度自分自身を振り返り、色々な場面で自分がどう考えているのか、そしてそれを自分の意見として発言できるようにしていきたいとあらためて感じた。

2つ目は、グアムは母系社会であり、男性も子育てに参加するということだった。日本では女性が社会進出する時代となり、男性の積極的な子育てということで、男性の育児休業取得を促進する動きがはじまり、「イクメン」という言葉も聞かれるようになった。しかし、現実にはなかなか男性が積極的に子育てに参加できるような環境が整っていないため、男性の育児参加は厳しいのが現実であると考え。そこには、環境や文化、ジェンダーなどが様々なものが複雑に関係しており、現在の日本の少子化、女性進出、不妊、高齢出産など問題にとりあげられているものも、それらが大きく影響していると考え。母系社会で女性は社会進出できており、男性も子育てに参加しているというグアムの社会に、日本が今取り組んでいる問題解決へのヒントがたくさんあるのではないだろうか。これこそ、日本のシステムや社会の考えに固執せず、世界から見た日本、日本を世界と比較するなど視野を広げ、よりよい日本社会を考える重要性を感じるとともに、グアムやミクロネシアの母系社会についてもっと学習を深めたいと思った。

3. ミクロネシア連邦

1) チューク州ウエノ島

グアムから飛行機で約 1 時間 40 分、ミクロネシア連邦のチューク州の州都であるウエノ島に到着する。初めて訪れるミクロネシア連邦。飛行機の窓からチラッとエメラルドグリーンに輝く海の景色を見ることができたが、実際到着して、海をみると、波が荒く、そのせいか海も少し濁っていた。後で気づいたことだが、台風が影響していた。まずは、ホテルのお迎えの車で空港からホテルに向かったのだが、悪路に驚いた。出発前から先生に聞いていた話ではあったが、想像以上にデコボコが大きく多数あるため、車の揺れが半端ではなかった。空港からホテルまでは近い距離なのに、悪路の為にスピードが出せないため、倍以上の時間を要していた。メインである道路がこれだから本当に驚いた。ウエノ島を車で移動しているときや散策しているときに、現地の人々が私たち外国人を見た時の反応にも驚いたことの一つであった。他国での私の経験や聞いた話で日本人が訪れた国で外国人を見たときの反応は、珍しそうに見られる、野次がとんでくるなどであるが、ここでは笑顔で手を振ってくることだった。初めての反応に最初とまどいを感じながらも、同じように手を振って応えた。初めて訪れ緊張もある中、現地の人々の笑顔は嬉しかったし、緊張を解いてくれる一つでもあったように感じる。

ウエノ島のスーパーマーケットを訪れたが、私が予想していた以上に日本の食材があった。生野菜などはごくわずか、しかも新鮮なものはあまりなかった。数多く陳列されていたのは、缶詰やラーメンなどであった。このスーパーマーケットや市場からでも、経済や保健などを考えることができる。

観光局長のメイソンさんから、チューク州の歴史や文化についての講義と、実際にトノアス島を訪れ、第二次世界大戦時の戦跡見学を行い案内していただいた。ミクロネシアと日本の関係はほかのオセアニア地域に比べて格段に深く、1914 年から 30 年間にわたってミクロネシアは日本の海外領土となり、日本から大量の移民が海を越えて渡り住んだところ⁴⁾である。トノアス島には、病院や小学校など戦跡が数多く残されており、近辺の海には数多くの沈船もあるとのことだった。やはり胸が苦しくなり、グアムで感じた思いと同じであった。ミクロネシアで使われている現地語にもたくさんの日本語が（例えば「さしみ」「べんとう」「しんぶん」など）数多く使われているのには驚いた。

2) ピス島

ガソリタンクの故障か何かでガソリンが準備できず、また台風の影響によっては船が出せず、ピス島に行くことが危ぶまれたが、ガソリンも準備でき、天候にも恵まれ、予定通りピス島に行くことができた。船に乗って約 1 時間。潮風が心地よく綺麗な海を見ながらの 1 時間の船移動はあっという間に感じた。島に着くと、まずココナツジュースで歓迎してくれた。当然冷たくはないのだが、日本で飲むココナツジュースより何倍も美味しかった。島を一周散策し、島の植物や小学校などを見学した。島

を散策して気づいたことが、ゴミが落ちていないことだった。落ちているものは落ち葉や木の実、人間の落とした排泄物。食べたあとや使用したあとに出るプラスチックなどのゴミは落ちていなかった。実際には目にしていないが、島にお菓子を売っているところがあるということだったので、ゴミを捨てるところがしっかり決まっているのだろうと思った。島のゴミ問題はどこも深刻で問題になっている。ウエノ島でも同様であった。具体的なピス島でのゴミ処理についてもまたおさえておきたいと思う。

ピス島で3日間過ごし、日本での生活や環境も全く異なり考えさせられることが多かった。お風呂は井戸水のシャワー。使い方のわからない私をみかねて、現地の子がすぐに集まりジェスチャーで教えてくれた。小さい子でも簡単に井戸の水をくんでいたが、実際にやってみると簡単にみえてとても難しかった。湿気が多く流れるような汗が出るような暑い環境の中で、井戸水のシャワーは気持ちよく、言葉は通じないが現地の子どもたちと触れ合い、子どもたちの優しさを感じながら楽しく過ごせた時間だった。食事は、お世話になった島長さんの家族の女性が作ってくれた。かつおの刺身や魚のフライ、白飯、ラーメン、パパイア、バナナとココナツミルクと混ぜて蒸したものなど、どれも美味しくいただいた。調理しているところも見学させてもらった。日本でも同じであるが、お客さんが台所に立ち入ることはあまりないことで、初日の夕食作りをお邪魔して見学させてもらったが、やはり初対面。距離と壁を少し感じた。短いピス島での滞在、現地のことを少しでも理解し、現地の人との交流を大切にしたいと、時間があるときはなるべく現地の人とコミュニケーションをとるようにした。2日目は一緒にドーナツ（ここでは「テンプラ」とよばれている）作りをさせてもらった。私のつたない英語をなんとか理解してくれて時間の経過とともにお互いを少しずつ理解し徐々に見えない壁がとりのぞかれていくのを感じた。2日目の夜は、教会の青年団の集まりがあるということで、私を誘い、参列する際に必要なスカートも貸してくれた。教会で何が行われるのか緊張したが、誘ってもらったことが私にとってとても嬉しい出来事だった。私はキリスト教ではないが、なんだか不自然に感じながらも一緒に礼拝に参加した。礼拝で歌われる賛美歌はとても綺麗だった。3日目も日曜日の礼拝があり、今度はスカートではなく、現地の衣装のドレスを着ての参加でこれも家族が貸してくれて、一緒に参加し楽しい思い出となった。現地の方の宗教心や、宗教と現地の生活などがどれほど密着しているのかは、今回の滞在期間ではわからなかったが、機会があれば次回の課題としたい。

2日目はピス島から船で15分離れたところにある無人島で漁業体験をした。綺麗な海に癒されながら、シャコガイ等を採集。現地の方はこれまた簡単にやってしまうが、実際はかなり難しかった。夢中になってやっているとあっという間に時間は過ぎた。採集した陸ガニや貝、魚、ロブスターなどをバーベキューし、食す。最近よくテレビで、無人島で自給自足の生活をする番組をみかけたりするが、まさしくそんな感じではあったが、とっても贅沢な食事と時間だった。

ピス島で過ごした3日間、本当にあっという間であったが、お世話になった島長さんファミリーをはじめ、ピス島の方と過ごした時間は私にとって忘れられないものと

なった。日本との環境や生活様式の違いに戸惑いもあったが、現地の人の優しさに触れ、元気な子供たちの目の輝きに感動とパワーをもらい、とても充実した時間だった。また自然いっぱいのピス島、モノにあふれ不自由しない日本の生活についても考えさせられる時間となった。

4. おわりに

今後国際社会を生きていかなければならない私たちにとって、グローバルな視野は必要不可欠になっており、現代社会を日本の国内だけでなく、世界的な視点でとらえ考えていくことが重要だと考える。この海外研修では、日本にしていると気づくことのできない多くの学びを、グアム・ミクロネシア連邦から日本をみつめなおし考えることができた。これらの学びは研修に参加したからこそ得られたことであり、心からこの研修に参加して良かったし、忘れることのできない時間となった。今後もここでの学びを忘れず、身近な地域社会においても国際社会においても広い視点でとらえ考えられる人でありたいと思う。

今回一緒に研修に参加したメンバーと過ごした時間、色んなことを話した時間は、色々と考えさせられることが多く有意義であった。いいメンバーに恵まれ、助けられることが多かった。病気やケガがなく楽しく過ごせたのも山本先生をはじめメンバーのおかげだと感謝している。そして、今回お世話になりました関係者の方々、素晴らしい貴重な経験をさせて下さった大学並びに担当教員の山本先生には大変お世話になり感謝しています。本当にありがとうございました。

【引用文献】

- 1), 2), 3) 「地球の歩き方」編集室：地球の歩き方グアム 2011～2012年版,ダイヤモンド・ビッグ社,2010, P141, p133,p30
4) 印東道子：ミクロネシアを知るための 58 章,明石書店,2005,p4

【参考文献】

- ・ 印東道子：ミクロネシアを知るための 58 章,明石書店,2005
- ・ 石出法太：日本とのつながりで見えるアジア 過去・現在・未来 オセアニア,岩崎書店,2003
- ・ 「地球の歩き方」編集室：地球の歩き方グアム 2011～2012年版,ダイヤモンド・ビッグ社,2010
- ・ 小林泉：ミクロネシアの小さな国々,中央公論社,1982
- ・ 西牟田靖：僕を見た「大日本帝国」,情報センター出版局,2005